



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology
Newsletter

第 64 号 2014 年 6 月 2 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 22 回大会委員長挨拶>

平石 賢二：日本青年心理学会第 22 回大会のご挨拶

<特集：全入時代の大学生の学修への態度・意欲>

渡邊 照美：全入時代の大学での講義に思うこと

小平 英志：大学生たちは意欲を引き出されることに慣れてしまった？

半澤 礼之：教員養成大学の学生を通してみる、学びを通じた将来展望の揺れ

中山留美子：「生徒」であり続ける大学生との関わりから

浅野 敬子：学生像点描

松岡 陽子：「大学」と「青年」の暗黙のズレ

<書評>

山本 ちか：高坂康雅 著 『劣等感の青年心理学的研究』

<広報>

事務局からのお知らせ

<第 22 回大会委員長挨拶>

日本青年心理学会第 22 回大会のご挨拶

大会委員長 平石賢二（名古屋大学）

このたび日本青年心理学会第 22 回大会を名古屋大学で開催させていただくことになりました。開催日程は、11 月 1 日（土）・2 日（日）です。本学会大会の名古屋大学での開催は、第 5 回大会（大会委員長：速水敏彦先生）以来の 17 年ぶりとなります。

名古屋大学では、依田新先生をはじめとし、大西誠一郎先生、久世敏雄先生らが我が国の青年心理学の礎を築いてこられました。今大会でも、そのような名古屋大学の伝統を意識しながら、「名古屋大学らしさ」を表現できる大会にしたいと考えています。

準備委員会は、名古屋大学の同僚や東海地区の学会員の先生方に極力ご負担をかけないようにと考え、現役の大学院生・研究生を含めた、私の研究室出身の学会員だけで構成しました。現在、準備委員会はプログラム企画チームと広報・おもてなしチームに分かれ、参加者の皆様にとって少しでも有意義な大会になるように知恵を出し合っています。名古屋市は日本中のどこからでも比較的アクセスが良く、立地条件に恵まれています。会場自体は他大学と比べて特に魅力的というわけでもありませんが、私たち準備委員会のメンバーは思いを込めた小さなアイデアをあちこちに散りばめていきたいと考えています。

講演では、北京航空航天大学教授の鄭曉齊先生をお招きし、「変貌する社会と青年の

心理-中国の青年（仮題）」という演題を予定しています。鄭先生は久世敏雄先生の指導を受けられた私の大学院時代の先輩です。急激な経済成長と様々な社会的変化を遂げている中国の青年がどのように変わってきたのかについてお話いただき、日本の青年との対比を通して、青年とはどのように社会的文脈の影響を受けるものなのか、青年期の本質について考えていきたいと思います。

また、準備委員会企画研究法セミナーでは、名古屋大学の石井秀宗先生に講師をお願いし、計量心理学の専門家の立場から青年心理学研究のデータ解析において留意すべき点についてご講義いただく予定です。

他学会の開催日も近く、皆様大変お忙しい時期かとは思いますが、是非多くの方々がご参加くださいますよう心よりお待ち申し上げます。

＜特集＞ 全入時代の大学生の学修への態度・意欲

大学全入時代といわれて久しく、大学では「FD活動」「アクティブラーニング」など、大学教育のパラダイムシフトが求められています。このような中、日ごろの大学生への教育活動を通して見えてくる、最近の大学生の学修への取り組み態度や意欲について、どのように感じ、関わっておられるのか、規模や国私立等が異なる大学に所属の会員の方々にご寄稿いただきました。今の「大学生」「大学教育」について、会員の皆様と共有できればと思います。ご執筆いただいた会員の方々、ありがとうございました。

（担当：長峰伸治・三好昭子）

全入時代の大学での講義に思うこと

渡邊照美（佛教大学教育学部）

私が大学に勤務し始めたのは9年前。非常勤も含めて、わずかではありますが、数校の大学を見てきました。保育士や幼・小・中・高等学校教諭、管理栄養士等、資格・免許取得が就職に直結する学部で教育を行っています。

最初は驚きました。大学側から講義時に学生たちの出欠を取るように言われたこと、そして、学生たちが毎回きちんと講義に出席すること。その他にも、たくさんの驚きがありました。これが全入時代の大学なのかと実感した記憶があります。

先程述べたように、学生の多くが講義に「参加したい」というより、「参加しなければいけない」状況にある中で、いかに講義内容に興味を持たせるのかという点では試行錯誤をしています。出席率が高くなれば、自ずと私語も増えます。最初は「静かにしなさい」と注意し、大きな声で講義を行っていましたが、現在は私が黙ります。すると学生たちは静かになります。これは学生の実習先の小学校の先生がされていた方法です。また、教員採用試験の心理学分野で頻出の問題を解かせ、この講義のこの分野とつながりがあるというような話もします。頻出の問題を暗記させることが狙いではなく、大学での学びと将来はつながっていることも多いと意識させることが狙いです。心理学の概念を具体的な事例で話すと学生たちは理解が深まるようです。それを、さらに自分の身近な例で考えたらどうということなのかと促し、理論と実践がつながるようにと考えています。

あの手この手で学生の学修意欲をかきたてようとしている姿は、以前の大学教員像とは全く異なるものかもしれません。ただし、時代は変わっても、「参加したい」講義とい

うものは、講義する者が生き生きと楽しそうに語っている講義ではないかと思うのです。学修意欲向上のために、アクティブラーニング等の方法を取り入れることは有効だと考えていますが、講義する者が研究や学びのおもしろさを伝え、その内容で魅せる講義をすること。全入時代であっても、これが学生の学修意欲につながるものと感じています。

大学生たちは意欲を引き出されることに慣れてしまった？

小平英志（日本福祉大学）

「今日の授業、おもしろかったです。全然、眠くなりませんでした。」大教室の講義だと、5月を過ぎたあたりでこのような感想がちらちら目につくようになります。授業のことをほめてくれているのはわかるのだけれど、「眠くならない」ことが基準となるのは何だかねえ、と、やはり例年この時期に、授業で話題にしています。

数年前の教授会で、学生達の授業に対する態度が極めて受身的であることが話題になりました。授業評価の集計から、「よくわからない授業だった」とされた科目であっても「要望を出したり質問をしたりしたか」や「教員の推薦した図書を読んだか」という設問になると、Yes と答える学生が極端に少ないとの結果が明らかになったことからでした。

確かに、若者たちが情報に対して受身になりがちな時代ではあるようです。携帯電話は誰しもが持ち、その過半数がスマートフォンという時代ですが、ビッグ・データの解析結果や個人の閲覧履歴はこれでもかと活用され、個々のニーズに合った洗練された情報が直接本人に届くようになりました。一度閲覧した商品は、即座に関連商品とともに広告として表示され、興味のあるものをこちらがわざわざ検索する必要はありません。ネットワークに接続しているだけでちょくちょく購買意欲が刺激されるわけです。これは、消費行動に限られた問題ではないような気がしてなりません。学生たちは様々な場面で、事ある毎に意欲を引き出されることで、それに慣れてしまっている（そしてそれに疲れている）ように感じます。「最近の若者は意欲がないらしい」なんて学生たちに言ってみると、大抵の場合、反論があります。「私たちだって意欲はあるんです。ただ、具体的に何に注いでいるか、それはよくわからないですが」と。

なるべく学生の興味を引く授業になるよう工夫を、と思いながらも、それでいいのだろうかと悩みます。数年前から学生生活アンケートとIR（Institutional Research）部局の持つ情報を結合させて学生の学修支援に生かしてこうというプロジェクトに参加しています。少しでも自ら意欲を引き出す機会を学生たちに与えたい、もっと能動的な学びをしてほしい、と思っていますが、まだまだ取り組みの途中です。

教員養成大学の学生を通してみる、学びを通じた将来展望の揺れ

半澤礼之（北海道教育大学 教育学部 釧路校）

私は教員養成大学に所属している。IR（Institutional Research）担当の私のもとには、2014年度の新入生もその多くが教員志望であるというデータが届いており、その志望の背景には、「教えることが好きだ」といった教授志向や、「子どもと接したい」といった子ども志向が存在する可能性が示唆されている。このような志向を背景とし、将来の職業に対して明確な展望を持つ学生が多く入学してくることは、教員養成大学として望ましい状態ではあるだろう。そして、明確な展望を持った彼らのような学生の学修に

にとって必要なのは、教職・教科に対する知識や技術、態度を身につけることであるという大学教員も少なくない。私自身も重要であると考えている。

しかし、このように学生の学修を考える上で、先述したような「入学時点での明確な将来展望」がはたしてその前提となりえるのかについては検討が必要である。彼らの将来展望は、大学進学前に、教師という仕事に対する理解が不十分なまま形成されたものである。そして、理解が不十分であるにも関わらず、就きたい職業としては明確であるが故に、入学後に将来展望を描く際の柔軟性を欠くという結果になってしまっている可能性がある。大学教育は、彼らの持つこのようなある意味素朴な、そして硬直した将来展望に揺さぶりをかける必要があるのではないだろうか。

大学入学後の様々な学びを通じて、教職・教科に対する知識や技術、態度を身につけるだけではなく、「将来教師になる自分」を改めて問う経験が彼らにとって必要だと考えられる。大学で学びを進める中で、入学時点で描いていた「教師になる自分」という将来展望に揺れが生じることはマイナスではないと思われる。それは、自分の将来を見つめ直す契機になるからである。しかし学生の中には、「教員養成大学に進学したのに教員になることを迷っている自分」に対して否定的な感情を持つものも少なくない。私は学生の学修に関して、彼らの揺れを促しつつ、それが最終的には学生の大学適応や自己形成につながるようなアプローチを研究し、それを自らの教育実践の中に取り入れていきたいと考えている。

「生徒」であり続ける大学生との関わりから

中山留美子（奈良教育大学）

学生たちを見ていて感じるのは、彼らが高校までと同じ「生徒」の意識でいるということです。学修にもそれ以外の活動にも受け身で、教員や大学に求めるものが多いと感じます。授業評価アンケートを見ても、サービスの受け手としての意見が目立つように思います。

「学生」には、「簡単には答えの出ない課題の場に立ち続け、立ち向かう強さ」が求められますが、そのような課題に向き合うことが苦手な学生によく出会います。ただ、私自身が学生の頃は、大学が授業に対する要望を聞いたり、答えのない問いについて考えさせたりするような風潮がなかったように思いますので、あるときから大学生が「生徒」に変わったわけでもないかもしれません。

「学生」が活躍する主体的な学びの場（舞台）として、「アクティブラーニング」が導入されてきています。しかし、「生徒」である学生に単に場を与えても、彼らはそれを生かすことができません。大学教員には、「生徒」を「学生」に発達させるという役割も求められています。

前任校で、「アクティブラーニング」型の初年次科目を担当していました。事前の計画が周到でないと、指示は伝わらず、学生は動かず……。初年度は本当に大変で、「次の授業はどうするか」ということを、他の担当者たちと毎日夜遅くまで議論していました。おおよその内容と方法が固まってからも、毎週ミーティングをし、授業期間が終われば翌年度の企画に入るという流れを毎年繰り返しました。勤務校が変わった今もグループワークを中心とした授業を行っていますが、約半年前から着手して、直前には半日以上かけて最終準備やリハーサルを行うことが習慣となっています。

多様な考え方に触れ、自分自身で考えられるようになったという実感を得た学生は、

課題に向き合う姿勢が大きく変わります。その場に立ち会える喜びを糧に、日々取り組んでいます。しかし、「生徒」から「学生」への発達には、その実感の積み重ねが重要であり、大学をあげて、教員が協働しての取り組み（発達支援）が必要だと思っています。

学生像点描

浅野敬子（至学館大学）

現在の勤務先である小規模私立大学を拠点として働き始めてから40年を数える。関わる学科はさまざまに変貌をとげながらも、幼児教育・初等教育やそのための職業資格取得に寄与しうる大学教育という中核部分は維持し続けてきた。その性質上、学生が子どもを総合的にとらえ、理解する力の育成をめざして教育を構成してきた。4年間の教育課程の前半から設定した演習は学科の教員が共同で担当し、このような教育の総合的な視点を学生に醸成することを狙ったものであった。2000年代初めには異年齢の子どもと接する機会の少なくなった学生に対応し、2年次学生のための演習プログラムが確立した（百々・浅野，2003；時安・積・百々・浅野・高橋・加藤・岡田，2005）。年間の前半では幼稚園、小学校などにおいて子どもの観察機会を設け、さらに近隣の子どもたちのための行事の企画運営実施によって、子どもとの相互作用を通して子どもの理解を進める。前半での学習活動を問題発見的な活動につなげ、後半ではグループ研究を企画し実施する。関連文献を読み、子どもの理解に社会的な視野を取り込み、多様な科目の担当者が協力して学生指導にあたることで学生教育全体に、総合的な視点が維持されることとなったと思われる。

ところが、このプログラム作成の中心にあった教員から、それが期待したような成果を上げなくなっているという感想が聞かれるようになった。前半の観察機会と後半の研究との有機的な連関が希薄となり、問題発見と共有、探求の深化という活動につながっていない。ともすればグループ担当の教員に誘導された課題にそって、与えられた文献を紹介して終わる。またはウェブ上でキーワード検索した情報を貼付けて終わる。このような安易な学習態度がどのような事情で目立つようになったのか。学生の変化によるのか、学科教育の変化によるのか、様々な可能性を考えながら、改善策を検討しているところである。

「大学」と「青年」の暗黙のズレ

松岡陽子（大同大学）

私の所属大学では2009年度から新たに「ファースト・イヤー・セミナ（FYS）」という初年次教育科目を全学的にスタートさせた。新入生たちに、大学での学習/学修を進めるうえで不可欠な基礎的スキル・タイムマネジメントに始まり、ノートテイキング、レポート、プレゼン等—を入学後すぐの学期に通習得させるのが目的である。今や多くの大学がこのような科目（を含む初年次教育プログラム）を組織的に運営するようになった。

FYSではテクニカルな面だけでなく、そもそも大学がどのような場で、学生であるあなた方はどのような活動をどのようにしていくことが“求められる”のか、といったことも折に触れ説いていく。というか、「初年次教育」と言うときむしろ重要なのは後者である。FYSで扱う具体的“スキル”が“大学”とか“大学の授業”の文脈のなかに位置

づけられなければ、本当の意味のスキルとして彼らがそれらを身につけることも難しい。しかしそうした文脈の意味の伝達、共有が今、こちらが暗黙の前提—明示的に伝えれば通じるはず—としてきたほどスムーズにはいかなくなっているような気がしてならない。いわゆる全入時代に入って“大学”の社会的意味＝価値が変わったという以上に、彼らにとって「ある大学＝学校というコミュニティに参加すること」の個人的意味＝感覚が変わってきているのではないかとも思う。

ところで、私は担当科目の授業で「青年期」を取り上げる際、当然の如く“アイデンティティの拡散/達成”に言及してきたが、ここ何年かは学生たちの反応が薄くなったと感じていた。“アイデンティティ拡散”また“反抗期”などといわれても、あまりピンと来ないようだ。この前、彼らに直接聞いてみたところ、“親に反抗？うーん…親とはずっと仲よしだから…”という声が返ってきた（もちろん皆が皆そうではないだろうけれど）。

“近頃の若者は…”とは確かに昔からよくある言い方ではあるものの、暗黙の前提は一度できる限り取り払って、「青年（期）」を根本的に問い直してみるべき時かもしれない。

<書評>

高坂康雅（著）『劣等感の青年心理学的研究』

（風間書房、2012年1月刊、本体5,500円）

山本ちか（名古屋文理大学短期大学部）

先日、なにげなく学生に「劣等感はあるか？」という問いを投げかけると、「先生、劣等感ってどういう意味？」という質問が返ってきた。「劣等感」の意味がわからないということに軽くショックを受けつつ、本書の知見を引用させていただき劣等感の説明を行った（つい詳しく話してしまった）。著者の知見に、学生たちは「それなら、ある！」「それ、すごくわかる！」「その解決法、やってる！」と納得顔で一樣にうなずいていた。

本書は、著者の博士論文『青年期における劣等感の分析』から、再構成されたものである。(1)劣等感の要因、(2)劣性を認知した時に生じる感情と反応行動との関連、(3)パーソナリティ特性との関連、(4)劣等感の解決という4つの観点から実証的に検討がなされ、青年期の劣等感と劣等感の解決についての知見が述べられている。

第5章では、劣等感の要因の検討がなされており、最終的に7つの要因が見出され、青年期の劣等感の発達的变化も検討されている。第6章では、青年が劣性を認知した時にどのような感情が生じ、どのような反応行動がとられるのかについて検討がなされている。「容姿・容貌についての劣性」を取り上げ、検討されている点が非常に興味深い。第7章では、劣等感とパーソナリティとの関連を検討することで、どのような青年が劣等感を感じやすいのかについての見解が示されている。

さらに第8章では劣等感の解決法まで拡張して検討がなされている。また第9章では、教育現場への展開の可能性についても論じられており、現在劣等感に悩んでいる青年や、悩める青年に関わる教師・カウンセラーなどにも本書の知見は役立つであろう。

青年自身が「まさに自分のことが示されている」と感じられることが、青年期研究に求められることの1つであろうと思う。本書は、冒頭に記した学生の反応にあるように、現在の青年の1つの特徴を的確に捉えた青年理解に役立つ1冊と言えるのではないだろうか。

<広報>

事務局からのお知らせ

I. 白紙の会費納入伝票が届いています

2014年3月5日付で摂津正雀の郵便局から2013年度の年会費（正会員）7,500円を納入した伝票が事務局に届きましたが、住所・氏名欄が白紙になっています。これでは納入処理ができませんので、思い当たる方は至急事務局へご連絡ください。

II. 会員ホームページのリンク

日本青年心理学会ホームページ (<http://www.gakkai.ac/jsyap/>) の「学会の紹介」タブの最後に、「会員のホームページ」の欄があります。掲載をご希望の方は、事務局 (seinenshinri@gmail.com) までメールで連絡をください。

（記入例）山田花子会員（〇〇大学）のホームページ
青年期・進路指導の紹介、論文紹介など

III. 会員異動

IV. 送付先不明の方のお名前

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。